

「知的リアリズム」再考 21世紀の新しい描画発達研究に向けて

話題提供者：平沼博将（福山市立女子短期大学）
田中義和（名古屋短期大学）
加藤義信（愛知県立大学）
指定討論者：子安増生（京都大学）
古池若葉（東京理科大学）

企画者： 加藤義信（愛知県立大学）
浜谷直人（東京都立大学）

司 会： 浜谷直人（東京都立大学）

【企画趣旨】

絵は対象の表現であると同時に、描き手の心の表現である。絵のこうした表現としての二重性が、一方で「子どもは対象をどのように表現できるようになっていくか」という研究と、他方で子どもの心や人格の投影として描画表現を利用しようとする研究の、2つの流れを生み出した。前者のタイプの研究では、Luquetの「リアリズム」概念を軸とする発達段階論が20世紀を通じて大きな影響をもち続けたといえる。なかでも、幼児期後期から児童期はじめにかけての子どもの描画表現を「知的リアリズム」として特徴づける考え方は、美術教育のあり方に大きな影響を与えてきた。

「知的リアリズム」とはつまるところ、絵のテーマや内容にかかわらず、8歳がぐらまでの子どもの絵が一般的にどのような傾向を示すかを包括的にとらえた記述的段階概念である。だが、その記述は、もっぱら大人の絵にみられる「対象の正確な写し=視覚的リアリズム」からの隔たりをものさしとして行われることになる。また、そこでとらえられた絵の特徴は、子どもの心的イメージ(内的モデル)の反映として解釈される。だが、こうした視点からは、子どもの絵の重要な発達の側面の何かが見落とされてしまうことにならないだろうか。年齢に特徴的な傾向をのり越えていく変化のメカニズムを正しくとらえられないのではないだろうか。さらには、「リアリズム」を描画発達の鍵概念として用いること自体、西欧世界の絵画発展史を暗黙の前提としており、それで日本の、あるいは非西欧文化圏の子どもたちが描いた絵の本質的な特徴がとらえられるのだろうか、といった根本的な疑問も浮かぶ。

ただ、こうした疑問が提示されたからといって、Luquetの発達記述、なかでも「知的リアリズム」概念による発達記述の有効性がまったく過去のものになってしまうということはないであろう。で

は、何が生き残り何が乗り越えられねばならないか。描画における発達的变化の論理はどう構築されるべきなのか。

20世紀最後の四半世紀に興ったプロセス・アプローチや比較文化的な研究は、描画発達研究に新しい展望を開き、上記のような問いに部分的に答えてきたといえる。しかし、「知的リアリズム」の概念をめぐる根本的な検討は、21世紀にまで持ち越されてしまったように思う。そこで本シンポジウムでは、改めてこの概念を批判的に再考することによって、今後の新しい描画発達研究の方向を模索してみたい。

【話題提供】

子どもの描画活動における「動き」の表現

平沼博将（福山市立女子短期大学）

子どもの絵に関する研究は、これまで様々な学問領域において数多くなされてきた。心理学の領域でも、知能や概念研究、精神分析といった分野において研究が行われたが、これらの研究の問題点は、子どもの絵を子どものもつ知識や概念さらには無意識までも忠実に表すものとして捉えたことにあった。

1970年代以降Freemanや彼の業績を受け継ぐ研究者たちが行った描画過程の詳細な分析(プロセス・アプローチ)は、描画活動が複雑な問題解決過程を含んでいることを豊かに実証した。けれども彼らの研究は、その多くが人物や静物などの形態がどのように描かれるのかといった問題を扱ったものであり、なかでも対象の「奥行き」や「遮蔽」といった3次元的位置関係を2次元である紙の上に如何にして描くのかといったことがテーマの中心であった。

ところで、実際に子どもたちの描画活動を観察していると、子どもたちが、その過程において「描こうとする対象の形態をどのようにして表現する

か」という問題ばかりでなく、「描こうとする対象の時間的変化（動き）をどのようにして表現するか」といった問題にも直面していることに気づく。Luquet はこうした描画表現を「絵物語(narration graphique)」と呼び、知的リアリズム期独特の表現法として注目しているが、最近の心理学研究では、子どもたちが如何にして絵で物語るのかといったテーマはあまり取り上げられていないように思われる。

しかし、対象の「奥行き」や「遮蔽」を表現するということが「対象の3次元的位置関係を2次元空間である紙の上に表現する」という複雑な問題解決過程を経なければならぬのと同様、「対象の時間的な変化を一枚の絵としてまとめる」ことにも様々な問題解決を必要とするに違いない。そう考えると、これまで見過ごされてきた感のある「動き」の描画表現の研究は、子どもたちの描画活動における心理状態や認知過程を明らかにしていく上で、われわれに新たな視点を提供してくれるのではないだろうか。

「知的リアリズム」で児童画の特質はどこまでとらえられるか

田中義和（名古屋短期大学）

子どもの絵を大人の絵とは異なる質的特徴を持つものとしてはじめて体系的にとらえなおし、それを「知的リアリズム」という言葉で概念化したのは Luquet であった。

幼児期から小学校低学年の子どもたちの描画には、通常大人の絵に見られない様々な特徴が見られる。レントゲン画、視点の混合のなどがその代表的なものであろう。重要なのは、Luquet はこれらをあくまでも「リアリズム」という枠組みでとらえたことである。どんなに大人目から見ても奇妙な絵でも、それは、子どもなりのリアリズムの結果であるとされる。Luquet によれば子どもの描画は、単なるなぐりがきの段階、偶然の写実性、出来損ないの写実性、知的写実性、視覚的写実性と段階を経て発達していく。最初の純粋のなぐりがきの段階を除けば、子どもは常に写実を意図して描画しているが、その写実の質が大人と子どもでは違うというのが Luquet の理解である。しかし、子どもの絵の大人とは異なった質的な独自性は、リアリズムという枠組みだけでとらえられるだろうか。確かに子どもはかなり早い時期か

ら写実を意図して描くことが見られる。しかし、同時に写実を意図しないものも子どもには多く見られるのである。男の子の戦争の絵に見られるごっこあそびのように展開していく絵、女の子のお人形さんやお姫様の絵のように子どもなりの「美の世界」を追求していく絵、時には、大人の抽象画のように形態そのものの面白さを追求したり、多様な児童画の世界がある。Gardner も「ドラマチスト」と「パターナー」を区別している。こうした多様な描画意図、描画への動機づけにも児童画の持つ重要な特質が現れているように思う。この面からも児童画の持つ特質、大人とは異なった質的独自性を検討していく必要があるだろう。

Luquet 批判としての Wallon の描画発達論

加藤義信（愛知県立大学）

Wallon はその晩年の 1950 年代に Lurçat と共同で描画発達に関する一連の研究を行ったが、それは Luquet の段階論を強く意識したものだ。Wallon は、初期のなぐり描きから形が現れ、形と対象との類似に先だてて形への命名が行われ、やがて両者間の類似の追求が子どもによって意識的に行われるようになる過程を観察に基づいて詳述している。これ自体は、Luquet の「リアリズム」概念を基軸とする記述と大きく変わらないように見える。しかし、年齢に伴う描画の質の変化を内的モデルの変化で説明しようとした Luquet に対し、Wallon は根本的に異なる視点を提起している。Wallon は、描画とは、なにより身体の、より局所的には手の運動の結果であるというあまりにも自明な事実から出発する。そして、描画過程を、それぞれの年齢に固有の運動性と表現意図の関係が、対立、葛藤、後退、飛躍をもって展開するダイナミックな過程として捉える。

Wallon は、こうした変化の様相を実験的手法を導入して微視発生(microgenèse)的に捉えようとした。すなわち、子どもに3つの異なるテーマの人物画を描かせた後、大人がその絵の不十分さを指摘し修正を求めたとき、子どもの絵にどのような揺れ(fluctuation)が生ずるかを見ることによって、構造的変化の生まれる場に立ち会う観察を試みたわけである。ここには、Vygotsky の最近接の発達領域の考え方に近い発想を読みとることもできる。描画発達の変化の論理を精緻化しようとするとき、Wallon の視点は示唆に富む。